



「お久しぶりです」

レストランの予約席に辿りつくなり、加凜は何もなかったように微笑んだ。事務所は狭いし、お世辞にも綺麗とは言えないので、とりあえず、ここで話をすることにしたのだ。

新しい店ではなかったが、昔ながらの丁寧なサービスの欧風料理の店で、ゆっくり過ごせるはずだ。少しハスキーな女性シンガーの「スマイル」がかかっていた。

ボーイが椅子を後ろから押してくれて、彼女はゆっくりと腰掛けた。

彼女から電話があったときには嬉しい半面、恥ずかしさも感じた。ポストに入れた手紙は、取り繕ってはいても松作の願望が透かし見えたかもしれない。

しかし、こうして間近で彼女を見ると、相変わらず若く見えるのに驚いた。ろうそくの炎で艶っぽいシルクのブラウスが輝き、顔を引き立てているせいかもしれない。

「全然変わらないね」

「やだ、お世辞はやめてよ」

「いや、本当だよ。それに、こんなに早く会えるなんて思わなかった」

「迷惑だった？」

「そんなことない、うれしいよ。もう、会えないと思っていたんだ」

彼女は、私もそうかもしれないって思ったと言った。

格好悪いところは見せたくなかったが、メニューを見ても、ワインの良し悪しはまったくわからなかった。ボーイにお薦めを尋ね、それに決め、コースメニューを注文した。

「この前、ポストに相談があったらいつでもどうぞっていう手紙を入れて帰ったでしょ。それで来たの」

やっぱり仕事のことだったかと、松作は寂しいようなほっとするような複雑な気持ちになった。

「何があったの？」

松作は照れ隠しに、あまり反応を示さず、先を促した。

加凜は、写真館で子供の幽霊を見たこと、そして、栖栗茂の部屋にあったアルバムの話をはじめた。写真のことを聞いて、松作は嫌な予感がした。

「この少女のことがどうしても知りたくなったの。彼女は多分、子供の頃の栖栗夫人ソフィーなんだと思ったんだけど。で、私の前に現れたということは、何か私に伝えたいことがあるのかもしれないって思っ。でも、栖栗さんにそんなことを話すわけにもいかないでしょ。それで、相談しに来たわけ」

「そうか。それだけ？」

「えーと。松作くんは栖栗写真館のことは知らないわよね？」

「うん、知らないよ。なんで？」

松作はなぜか嘘をついてしまった。

「ううん。なんでもない」

加凜は、何かを頭のすみに追いやるかのように頭を振った。

「それで、その少女が写っていた写真の場所はどこなの？」

「多分、上海だわ。栖栗さんは戦前に上海で夫人と知りあったという話を聞いたことがあるの。栖栗さんの家族は上海で紡績会社を営んでいて、何不自由のない生活をしていたらしいわ。彼の母親は欧米人に、刺繍や料理をならっていたそうよ。そういうつながりだったかもしれないと思うんだけど」

「その頃の上海には欧米人も大勢いたからね」

「よく知ってるのね」

「いや、それほどじゃないけど」

「ねえ、それでお願いなんだけど、あのときみたいに、栖栗さんがいた頃の上海に連れて行ってもらうことはできない？」

五年前、柷作は加凜のためにある事件を調べた。だが、結果的にその人物の死に際を見せることになってしまい、それによって彼女にひどいショックを与えてしまった。

そんな軽率なことをしたのを柷作は後悔した。それに、やはり、秘密を知られては、一緒にいられないと思った。今まで特別依頼を受けた相手には、二度と会わないようにしてきたのだった。それで、彼女の前から姿を消したのだった。

「ひとつ断っておくけど、興味本位に見にいくだけっていうのは、よくないと思うんだ。行ったからって過去を変えられるわけじゃない。ただの傍観者だ。いつも俺は、見たあとには自分が何十年も歳をとったような気になる。君だって、五年前にそう思わなかった？ 本当は後悔したんじゃない？」

「うん、あのときはちょっとショック大きかったな」

「俺も、後悔したんだ。本当にわるかった」

「ううん、そんな風に思わないで。私、あれで、長年のもやもやがすっきりしたのよ」

「本当に？」

「うん。父のこと、今では恨んでいないわ。だから、連れて行ってほしいの」

「栖栗さんのことがそんなに気になるの？」

「うん。私は今まで、栖栗さんに認められたいと思ってきた。でも、このごろ、あの人のことがわからなくて。ただの頑固なおじいさんだと思っていたけど、本当は違うんじゃないかと思うようになったの。昔のことを知ったら、何か少しはわかるかと思って」

柷作はしばらく加凜を見つめた。

「わかったよ。じゃあ、まず、行く世界のことをこっちで調査してみよう。そうしないと効率が悪い」

柷作は事前に栖栗が住んでいた戦前の上海のことをざっと調べ、二日後に再度会うことを提案した。

もしかしたら、加凜はあの写真を見たかもしれないと柷作は思った。別に隠す必要はないのだ。だが、なぜか言えなかった。

礼郎は古い文献を図書館に調べに行った。実家にも何かあるかもしれないが、そんなことはしなくなかった。

二日後に約束通り加凜は桧作の事務所を訪ねた。

玄関から入ってすぐ左側にある部屋に通された。ここを事務室として使ってるらしい。加凜は勧められるまま小さなソファに腰掛けた。

桧作はお茶を入れてくるよと言って、キッチンへ引っこんだ。

あるのはテーブルと小さなソファ、雑誌を何冊か入れたマガジンラックと小さな本棚だけだった。北側なので、窓からの光はあまり差し込まなかった。

テーブルの上に上海歴史地図という本が載っていた。加凜はそれをパラパラとめくってみた。地図の中に建物や橋などの名前と数字が赤字と黒字で入っていた。赤字は戦前の呼び名、黒字は今の呼び名だ。数字はどうやらそれが建てられた年号らしい。例えば、「ガーデンブリッジ 1907」と赤字で書いてある。

桧作は奥に引っこんですぐに、紅茶を運んできた。

「その^{ファンキョウ}虹口地区のページに出ているけど、栖栗さんが住んでいたのは上海の日本租界となっていた虹口のデキセイロアパートだったらしい」

加凜が、よく調べたのねと感心した素振りをすると、桧作は少し機嫌をよくしてくれたようだった。

「これでも探偵だぜ。なんとか、つきとめたよ。その頃の上海の地図は何度も眺めて、大体、頭の中に入った。あとは、栖栗茂さんがソフィーに出逢った日だけど、それは、あの糸を辿って飛んでいけばいい」

加凜にはよくわからなかったが、桧作は過去からつづくその人の運命の軌跡が、^{あや}綾なす糸のように光って見えると言う。

それを辿って過去へと飛んでいくのだ。

「そうだ、依頼料を支払わなきゃ。ちゃんと払うから教えて」

「いいよ。今回は特別に只にしておく」

「そんなの、申し訳ないわ」

「いいんだよ。気にしないで。ところで、もう一度、確認しておくけど、とりあえず、調べたいのは栖栗さんが、ソフィーさんとどうやって知り合ったか、彼女がどんな人だったかということだったよね」

「うん、本当はなんでソフィーが幽霊になって出てきたのか知りたいんだけど、それは多分、無理だから」

加凜はそう答えて、紅茶を一口飲んだ。桧作は納得して、出発する準備に移った。

「じゃあ、そろそろ行こうか。こころの準備はいい？」

桧作の問いに加凜はゆっくりとうなずいた。

桧作は、加凜が栖栗のアルバムから一枚拝借してきた写真を、目の前のテーブルに置いた。

それは一枚だけあった上海の街並みを写したものだだった。

加凜は言われるまま、桧作と手をつなぎ、その写真をじっと見つめた。

見ているうち、人物たちが、蜃気楼のように揺らめいた。

次第に、それは気のせいとは言えないほど立体化し、色づいていく。

自分の体が、綿毛のようにふわりと舞い上がるこちがして、風を感じた。みるみるうちに写真の風景が視界全体にひろがっていった。

その刹那、ふたりはその世界に吸い込まれるように落下していった。

加凜は気付くと、戦前と思われる上海の大通りに桧作とともに尻もちをついて座り込んでいた。だが、誰にも見とがめられることはなかった。ここではふたりはさしずめ、透明人間といったところだ。でも、お互いの姿はなぜか見えるのが不思議だった。

『いたた。お尻を強く打ったみたい』

加凜は立ち上がろうとして、鋭い痛みを感じ悲鳴を上げた。

『大丈夫？ 慣れてないと、しばらく痛むかもしれない』

桧作は加凜を助け起こしながら言った。

目の前の店の看板には、横書きで現代で見かけるのと逆向きの右から左に`内山書店、と書かれていた。確かこの書店は日本人がやっている有名な大規模書店だと、歴史マップに書いてあった。目の前の通りが北四川路きたしせんろで、これを南に行けば狄思威路デキセイロアパートに着くはずだと桧作は言った。

この虹口ファンキョウのあたりは、欧米人が設計した鉄筋コンクリートやレンガ造りの建物が林立する街並みだったが、その頃では、すっかり日本人街となっていた。街を往来する人々はほとんどが日本人、日本語の看板のある和菓子屋やら洋品店、ユダヤ人が出した洋菓子店などが並んでいた。日本人に混じって、しゃれた身なりの西欧人や、小さな丸い帽子をかぶり、裾のひろがったロングスカートのような民族服を着た物売りの中国人が「ファイフォー」などと声を上げながら天秤棒を担いで通り過ぎていく。あちこちの地べたに中国人が売り物の入った箱を並べており、物乞いも座り込んでいる。この北四川路には路面電車や二階建てバスも走っていたが、黄包车ワンボウツォウと呼ばれる人力車もあちこち沢山客待ちをしていて、新旧、東西のあらゆる文化の入り混じる場所だった。ここはもともとアヘン戦争のあとに英・米の作った共同租界で、日清戦争の後から日本人も入れる権利を得た。そのため、その三国の治外法権が成立する、いわゆる無法地帯であった。それでも、もし犯罪が起されば、罪人の出身国法で裁かれて、うまく社会が機能していた。

街頭で新聞を売る中国人の持っていた朝刊の日付を確認すると、今日は一九四〇年五月二十日だった。この日が、栖栗がソフィーに出あった日らしい。

狄思威路アパートにつきポストを確認すると、栖栗の住まいは五階の東端の501号だった。上海の多くのアパートがそうだったように、ここもスチーム暖房、ガス設備、暖炉やエレベーターなどの最新設備をそなえた英国式の鉄筋コンクリートのアパートだった。

その日、栖栗の家には母の幸江ゆきえに料理や編み物を教える英国婦人アンナが来ていた。チェリーパイの作り方の指導のあと、幸江が娘たちのために編んでいたセーターの袖付け部分を教えてくれてから帰っていった。だが、帰った直後に、幸江は忘れ物に気付いた。彼女の大事にしていた懐中時計が机に載っていたのだ。一つの胴体から、二つの頭の生えた眼光するどい鳥の文様がついていて、大層、高級そうだった。

「どうでしょう。今度先生が来られるまで大切にしまっておくしかないかしら」

「ぼくが今、走って行って渡すよ」

茂が言い出した。

「大丈夫？ これはアンナ先生の大切なものだから、落としたりなくしたりしたら絶対だめよ」

「へっちらだよ」

「そうお？ じゃあ、アンナ先生、バス停でバスを待っていると思うから。お父さんの工場がある楊樹ヤンジッ浦路とは逆行きのバス停だからね。そこに居なかったら、帰ってらっしゃいね」

幸江はその時計を割れないように襦袢ふくさに包み、中から零れ落ちないように嚴重に縛って渡した。

「落としたり壊れちゃうから気をつけるのよ！」

一番上の姉の佳代も口をはさんだ。

「そんなの、わかってるよ。じゃ、行ってきます」

中学校二年生だった茂は、急いでアパートを出ると彼女を追いかけた。初めは走って行って彼女にすぐ渡そうと思ったのかもしれないが、そのうち面白くなって、家までついて行こうと考えたようだ。上海の路地裏には人さらいが出ると言われ、路地に入ることは親から禁じられていた。だが、茂は他の男の子の例に漏れず、冒険と称してあちこち歩きまわるのが日課だった。路地裏は、薄汚れて食べ物や汚物などの匂いも漂う得体の知れない空間だった。なかでも市場はあらゆる食品や人間たちの博覧会のように、見たこともない香辛料や食べ物や品物があふれ、貧しい子供が金になりそうなものを拾い集めたり、ときには盗みまがいのことをする者もいた。

彼女はやはり北四川路のバス停でバスを待っていた。

二階建てバスに乗り込むのを見て、茂もそれに乗った。

バスは ヘンバンキョウ 横浜橋 を渡り、四川路橋を渡ったが、彼女は降りなかった。

映画館やバー、ダンスホールなどの建ち並ぶ繁華街をバスは通り抜けていった。

やがて ジョッフル 霞飛路へ入った。

ここはもう、仏蘭西租界だ。

そこで彼女が立ち上がったので、茂は急いで後を追いかけた。

バス代はなんとか足りたが、帰りの分はなかった。

彼女は路地へと入っていき、とあるアパートの中に消えた。

玄関の側へまわり、彼女が自分の部屋の扉を開けるのを見届けた。

エレベータに乗ってその階へあがり、玄関に着いたあと、しばらくためらったが思い切ってベルを押すと、予想に反して自分と同じ年頃に見える異国の女の子が出てきた。蒼い目が印象的だった。時計を渡すと、少し首をかしげた後で笑顔を作って、中に入っていった。

まもなくアンナが出てきて、日本語で「どうも、ありがとう」と礼を言い、感激した顔で茂の手を握り締めた。やはり、その時計は彼女にとって、とても大切なものだったらしい。

その時、茂はたまたま内緒である人から借りてきたカメラを首から下げていた。それを見て、女の子とアンナは興味をしめした。ひとしきり見せてあげたあとに、写真を撮った。喜ぶ女の子を茂は嬉しそうに見ていた。

この女の子はあの写真の面影がある。これが栖霞がはじめて逢ったアンナの娘のソフィーだったらしい。

その後、彼は長いこと歩き続けて、家にたどりついたのは夜も更けてからだった。

居間に入ると、茂の父は礼装姿で、ソファでいらいらと体を揺すりながら待ち構えていた。これから、出かける予定があるらしい。茂の姿を見ると、はじかれたように立ち上がり、一瞬、安堵したような顔をしかけた。しかし、また思いなおしたのか厳しい顔になって叱った。

「まったくこんな遅くまで、一体どこほっつき歩いていたんだ!？」

「まさか、時計を無くしたとか言わないでしょうね！」

母の幸江も、少しヒステリックに尋ねた。

「ちゃんと渡したけど、帰りのバス賃がなかったんだよ」

「まさか、アンナさんの家まで行ったって言うの？」

茂はすごすごなずいた。

「馬鹿者! 何考えているんだ!？ 母さんたちががどれだけ心配したと思ってる？ それにそのカメラはどうしたんだ！」

父親に平手打ちされても、泣きもせず口をへの字にして下を向いていた。

『あーあ、怒られちゃって可哀想に。栖霞さんにも、こんなに可愛い少年時代があったのね』

『うん。でも、この頃から、根性あったみたいだね』

彼の様子を見ていた加凜と桧作は、感想を言いあった。

加凜は栖霞のことを心のどこかで、お年寄りで、自分とはまったく違った人だと思っていたのに気づいた。これからは、もうそう思うのはやめるべきかもしれない。

「そんなに怒るなよ。それは私が貸したんだ」

そのとき、手前の応接室から男が出てきて、そう言った。茂の父と同じようにスーツに身をかためていた。

「桧作くん、君のだったか。だが、あまり、茂を甘やかしてもらっては困る」

「いや、申し訳ない。今度から気をつけるよ。なに、彼がカメラに興味を持ったようだったから、二日間だけという約束で貸したんだ。悪かった。茂君、そのカメラは明日、うちの孝一に渡してくれ。さあ、遅れるよ。もう、外に黄包車が止まっている」

「うちのことで君にもいらぬ心配をかけた。申し訳なかった。じゃあ、行くとするか。茂、もう二度とこんなことをしたら許さんからな！」

そう言うと、茂の父は先頭にたって部屋を出て行った。後に続いた桧作という紳士は、茂の方を振りかえって微笑み、手を振った。ふたりは仲間達との約束の晚餐へ出かけていったらしい。

『ねえ、あの人の名前、桧作さんだって、それに賢司君とそっくりじゃない』

まさか、ここに今晚、彼が来ているとは桧作は思っていなかった。だが、仕方ない。正直に認めるしかないだろう。

『うん。彼は俺の祖父さんだ』

『なんで、ここに？』

『実は、うちの祖父と栖栗さんとは戦前、親交があったんだ。祖父も上海にいたことがある』

『そうだったの。何でこの前は知らないって言ったの？』

『ごめん』

桧作はそう言うなり、遠くを見る目をした。加凜は触れてはいけないことだったのかと、少し不安に思った。

『それでわかった。実は、この前、栖栗さんのアルバムに賢司くんにとっくりな男性が写っているのを見つけたのよ』

『俺、祖父さん似らしいんだ。本当は黒田さんがあの写真館で働きはじめたって知ったときは、びっくりしたんだ』

『でも、この後、栖栗とソフィーは、どうやって結婚までいったのかしらね。それに、あの女の子の幽霊はどうして出てきたのかな』

『それを調べるためにこんな追跡をずっとしてたら、何年もかかるよ。やっぱり、栖栗さんと直接、話して何か手がかりを引き出すしかないかもしれない』

『そうね。それしかないかもね』

加凜の手がすべり、リリースが手から離れて、ぶら下がった。今日はこれで五回目だ。手に冷や汗をかいているのを感じる。作り笑いを浮かべながら謝り、握りなおした。お客様は気にしていないようだったが、栖栗は見逃さなかった。肩から腕にかけて痺れを感じる。昨日、現実界に戻ったときの衝撃のせいだとわかっていたが、そんな理由を並べたてるわけにはいかない。

「この頃、仕事に身が入っていないんじゃないかね？」

撮影後、栖栗に叱責された。気のゆるみを栖栗氏に気付かれてしまったことに、加凜は唇を噛んだ。親しみが湧いたせいで、逆に怠惰につながってしまったかもしれない。これでは、また評価が下がるに違いない。

「申し訳ありません。気をつけます」

加凜は詫びたが、栖栗の怒った顔はなかなか元に戻らなかった。どうして、こんなに気難しいのだろうとやはり思ってしまう。こんな態度をとられると、あの可愛らしい少年の面影はどこかへ消えてしまう。

「黒田さん、話があるから、来てもらいたいんだけど」

その日、加凜は突然、礼郎に呼びとめられた。

無視して、逃げ出したい衝動に駆られたが、そんなことをしては、大人気ない。また、この前の話だろうか。しづしづ、返答した。

「話なら、ここでいいじゃないですか」

「じゃあ、ここで話すか。人に聞かれちゃ困ることだから、向こうに行こうと思ったんだけど」

「この前の話ですか？」

「違う。それはもういい。その気がないってわかったよ」

それを聞いて、少しほっとした。

でも、他に何の用があるというのだろうか。加凜は嫌な胸騒ぎがした。

「実は、黒田さんが祖父のフィルム倉庫に入っていったのを見たんだ。一体、あそこに何をしにいったわけ？」

加凜は驚いて、何も言えなかった。

「じいさんに言うことだって出来るんだぜ。けど、正直に話せば、言わないでおいてやるよ」

どうしたらいいのだろう。彼は本当に約束を守るのだろうか。

「言っても信じてくれないわ」

「何だよ。早く言いなよ」

「その...、私、近頃、座敷童子の足音や声を毎日聞いていて、おかしくなりそうだったの。それであの日、あの扉の中にその足音が入っていくのを聞いて、扉を開けて見たのよ」

「ちょっと、待って。黒田さんは、今、聞いたって言ったね。音しか聞こえなかったのにそこに入っていったって、わかったの？」

「ええ、あの扉だけ、ギーって音がするのを知っていたの。栖栗さんが入るとき、いつも鳴っていたから」

「ああ、そうか」

「そしたら、白人の女の子の幽霊を見てしまったのよ」

「茂じいさんみたいなことを言うんだね。だけど、あそこは、茂じいさんのプライベートな部屋で、沢山フィルムが置いてある。そこに無断で入るのはよくないよ。やっぱり、黒田さんには悪いけど、このことは報告させてもらう」

「約束が違うじゃないですか」

なんて卑怯な人だろう。

礼郎は栖栗氏にこのことを報告したが、栖栗氏の反応は予想外に冷静なものだった。

「黒田くんも悪いが、私が鍵を掛け忘れていたのも悪かった。仕方ないね。もう、これからは、入らないように気をつけてくれよ」

栖栗は、パイプからぶかりと煙を吐き出してから言った。

「本当に申し訳ありませんでした。もう、絶対にしませんので、許して下さい」

「ところで、あそこで座敷童子を見たんだね」

「栖栗さんが言う座敷童子って、やはりあの外国人の女の子のことなんですね」

「ああ、あんなに可愛いものを幽霊と呼ぶのはすぐわない。ところで、座敷童子以外には何も見なかったのかい？ 写真が沢山置いてあるけど、それは見なかったのかい？」

「いえ、少し見てしまいました」

「ほう、それでどうだったかね」

「報道写真も素晴らしいと思ったんですが、小さな女の子たちの写真がとても可愛かったです。節目節目に家族が全員着飾って集い、写真を撮るといふ、今から考えると大仰な習慣でしょうが、その大仰さがとてもいいと思いました。今の時代にもやるべきなんじゃないかって思いました。家族の絆が希薄になった今、結束を強める儀式になるような気もするんです」

「ほう、君もそんな風に思うかね。私も同感だよ。私はね、若い頃、報道写真に情熱を燃やした。それも大切だと今でも思っている。だが、私はソフィーと結婚してしばらくしてから、家族を犠牲にして世界を飛び回るのはもうやめようと思ったんだ。家族の大切さがわかったんだ。それで、この写真館を開いた」

「ちょっと、待ってください。どうして、彼女には甘いんですか。俺にはひどく言うくせに」

礼郎が声をあげて言った。

「そりゃ、お前のようにわからず屋じゃないからだよ」

「そうじゃない。あなたは俺が嫌いなんだ。俺の言うことにはちっとも耳を貸さないじゃないですか」

加凜は、礼郎がこんな風に思っていたことを意外に思った。彼の方が栖栗を嫌っていると思っていたが、彼はそんな風に考えていたのだ。

「そうだ。黒田さん、いいことを教えてあげるよ。これでも俺には王家の血筋が流れているんだよ」

「こら！ そんなことを言うんじゃない」

「どうして隠すんです？ 本当のことなんだったら、隠さなきゃいけない理由が俺にはわからないんです」

「それはな、言ったって誰も信じないし、嘘つき呼ばわりされるからさ」

「じゃあ、やっぱり嘘なんじゃないかな」

「これ、よそ様の前でそんなことを言うんじゃない」

王家とはどこの国のことだろう。ソフィーの方が、そういう血筋なのだろうか。だが、ここで、興味を示しても、栖栗氏には嫌がられることだろう。

「あの、ソフィーさんとは、どうやって知合われたんですか」

加凜は、別の質問を投げかけてみた。

「話すと長くなるんだが、いいかね。今まで、礼郎にもあまり詳しく話したことはなかったな。まあ、ちょっと年寄りの長話につきあってくれたまえ。」

父親が上海で紡績工場をやっていたために、私は上海で生まれた。上海はとても豊かでいい場所だった。子供だった私は、上海事変の前に治安が悪化したときには、いったん、日本の親戚の家に兄弟姉妹と一緒に帰されてしばらく暮らした。だから、その当時、軍部が何をしてたのかわからなかった。安全になってから、また上海に戻ったわけだが、第二次大戦中も私が暮らした上海は静かなものだった。空襲警報は鳴ることがあったが、北部小学校の前の通りに一トン爆弾が落ちて不発に終わったというだけだった。私がソフィーに出逢ったのは大戦のはじまる前の年だった。お母さんのアンナがうちの母に料理や編み物を教えてくれていたんだ。ある日、彼女の忘れ物を届けに行った。末娘のソフィーがたまたま出てきて、私の持っていたカメラに興味を示した。それで、写真を撮ってあげた。その写真を渡してあげたときにもう一度会った。でも、上海ではその二回しかあわなかったんだ。

戦後、私達は工場も住む場所も、すべて中国政府に^{せっしゅう} 接收 され、ああ、接收というのは国家が財産などをとりあげることだ。一人につきトランク一つ分の荷物だけを持って、日本への引き揚げ船に乗って帰ってきた。貴金属や宝石などの所有物も、持ち出し禁止で、隠し持っていたのがばれると全て没収され、帰国が遅れる人もいた。

帰る間際にこんなこともあった。父の山高帽が中国人のステッキで奪われ、次々と中国人の手で遠くへ渡っていき、「日本人は帰れ！」とののしられた。まったく予想しなかった出来事だった。それまで日本人は欧米人と同じように、名士として暮らしていた。最新式の総合病院や紡績工場、印刷会社などを建て、欧米人と対等に仕事をした。もともと、欧米人だけが入場を許されていた公園に日本人も入れるようになっていた。日本人が開いた総合病院の福民病院は、中国人にも等しく診療を行っていた。工場や病院では優秀な中国人を大勢雇うことで、現地の人々にも働き場所を提供していた。日本人が悪いことをしているなんて、少年だった私は思いもしなかったんだ。

それで、私は戦後、真実とは何だろうと考えるようになった。日本人から見た真実、中国人から見た真実、欧米人から見た真実。すべて真実といわれながらも、知らないうち自分に都合のいいようにねじまげられたところがあるものだ。

だが、写真は嘘をつかないのではないだろうか。

私はアメリカに渡り、カメラマンの修行をした。それで、カメラ片手にベトナム戦争へも行った。

アメリカでソフィーと再会したんだ。そこで私達は恋に落ちた。

彼女の祖父の写真好きがその娘、孫へと引き継がれて、ソフィーも写真が好きだった。それで、彼女もアメリカで女流カメラマンとして活躍していたんだよ。この祖父というのは、白系ロシア人だった。身分については、内緒にしておくよ。想像に任せる。何しろ、ソフィーも母親のアンナもそのことをあまり話したがいなかったものでね」

そこで、栖栗は溜息をつき、これが彼女について話せるすべてだよと言って、またパイプをふかした。

「なんだ、まったく。それだけですか。もっと、詳しく話してくれるかと思ったら。馬鹿にするのはいい加減にしてください」

礼郎が言った。

「難しい問題だ。全部、白日のもとにさらすべきか。そうでないか。わしは、あるときから、それは場合によると考えるようになった。そのことはまた今度話そう」

「まったく、これだからなあ」

礼郎はお手上げだというように部屋を出て行った。

せっかくの機会だ。加凜はもう一つ聞いてみることにした。

「あの、栖栗さんは桧作さんという方を知りませんか」

栖栗氏は、驚愕の面持ちで加凜を見た。

「桧作という苗字はそんなに多くないね。もしかして、桧作君とは桧作孝一君のことかね？」

加凜は、この前の上海での出来事を思い出してみた。桧作孝一とは、あのカメラを貸した桧作氏の息子だった。栖栗は彼と友達だったのだろう。つまり、賢司の父親ということになる。

「はい。そうです」

「どうして、君がそんなことを知っているのかわからない。遠い昔の友人だった。もう、彼は死んでしまった」

栖栗氏はぼんやりと遠くを見る目で言った。

「あの、私の知り合いに、その桧作孝一さんの息子さんがいるんです。この前、偶然、再会して、私が働いているところの話をしたら、知っているって言っていて」

「そうだったのかね」

栖栗氏は突然、怒ったような顔をして黙り込んだ。なぜ、彼を怒らせてしまったのかわからなかったが、言ってしまったことを後悔した。

「あの、私、余計なことを言ってしまったのでしょうか」

「いや、そんなことはない。それで、その桧作くんの息子さんは元気かね？」

「はい。元気です」

「私のことを何か話していたかな」

「いえ、昔、家同士の交流があったということしか言っていませんでした」

「うん。これは運命なのだろう。今度、彼をここに連れてきてくれないかな。私は彼と話してみたい」

加凜は喜んで、彼に聞いてみると答えた。

その日は、撮り集めた写真をアルバムに収めながら、加凜はコンテストに出す写真のことを考えていた。斬新さはないかもしれないが、どれを見てもところが和む。もう、コンテストの締め切りまで時間がない。だめでもともと。よく撮れているものを選んで、コンテストに出してみようと思った。

明るい日差しに溢れたカメラという箱に映し出された幻影たち。町並みで、偶然見つけたひとびとの暮らし、路地裏でひなたぼっこをする猫、そんなところ和まされるものたちが詰まっている。とにかく、今、出せるものをぶつけてみることにした。

桧作と再会を果たし、そのお蔭で栖栗のことを少し知ることが出来た。でも、あの女の子の幽霊は何が言いたかったのか、依然わからなかった。そして、栖栗とソフィーの^{いきさつ}経緯は栖栗自身の話でほとんどわかったが、今度はソフィーの母のことも気になってきた。

だが、こんなことを詮索するのはただの野次馬かもしれない。

そして、ここらの底では、以前にも増して桧作のことをもっと知りたいという欲求が強くなっていた。彼はあの物憂げな瞳で何を見て、そのところの奥底にはどんな思い出が横たわっているのだろうか。でも、今はまだ早いかもしれない。

加凜はまた、桧作の事務所を訪ねた。

「ねえ、実は余計なことだったかもしれないんだけど、栖栗さんに桧作君のことを話しちゃったの。そしたら、会ってみたいって言うのよ」

桧作はしまったという顔をした。

「申し訳ないけど、俺は会いたくないんだ」

「えー、どうして？ 栖栗さんが会いたって言うてくれたんだから、会ってみたらいいのに。きっと、桧作君のお父さんのことを話してくれるんじゃないかな」

「考えておくよ」

桧作は厳しい顔になって、そう答えた。

桧作も栖栗も何か態度がおかしい。

加凜は不審に思いながらも、話題を変えることにして、栖栗から聞いた話をはじめた。

「ねえ、ところでアンナたちは英語をしゃべっているから英国人だと思っていたけど、白系ロシア人だったらしいの」

「ロシア貴族だった白系ロシア人は普段、英語やフランス語を使っていた者も多いからね」

「上海の仏蘭西租界のあたりにはロシア革命のあと、白系ロシア人が大勢やってきて、しゃれたブティックやバー、ダンスホールなんかを開いていたらしい。だが、もともと貴族の出で慣れない事業に失敗し、金に困る人達も多かった。そんな一家は、夫人が言葉や料理、刺繍などを外国人相手に教えて生計をたてるものも多かったらしい」

「へー、やっぱり、桧作くんは上海のこと詳しいわね」

「詳しいのは上海のことばかりじゃないよ」

「そうか、さすがね。そういえば、びっくりしたけど、礼郎さんには、王家の血が流れているって本人が言ったのよ。ということはソフィーがロシア皇室の血筋だったってことかな」

「そうか。ねえ、ソフィーのお母さんは、アンナという名前だったね」

「そう言ってたわ」

「アンナ・アンダーソンという人を知ってる？」

加凜は知らないと答えた。

「彼女は、ロマノフ王朝の皇女アナスタシアだと名乗り出た人物なんだ」

「アナスタシア？」

「うん。ロシアの最後の皇帝ニコラス二世は、革命軍によって皇位を剥奪され、その後、家族とともに幽閉された。そして、最後には家族全員が処刑されたと言われている。だが、アンナ・アンダーソンは一人、銃殺をまぬがれ、兵士に救出されたと言った人物だった。でも、その真贋しんがんは、裁判で争われたけど、最後まで証明はされなかった」

「じゃあ、その人が本当のアナスタシアかどうかはわからないのね」

「ソフィーの母親もアンナと言うんだったよね」

「ふーん、彼女がアナスタシアだったという可能性があるのね」

「まあ、彼が言うことが本当ならだけど。栖栗さんが言う通り、そんなことを言っても、誰も信じないだろうね。だけど、この前、あの上海でアンナさんが忘れていった懐中時計の文様を覚えている？」

「ええ、二つ頭のある鳥の模様だったよね」

「あれは多分、ロシア皇室の紋章の双頭の鷲だ。まあ、だれかの手に渡っていたものを彼女が手に入れた可能性もあるだろうけど。革命軍は、はじめ皇帝のみを処刑し、家族は安全な場所に保護していると発表した。後にそれを撤回して、全員を処刑し、ある場所に遺体を埋めたが、アナスタシアとアレクセイの遺体は灰になるまで焼いたと発表したんだよ。なぜ、二人だけを灰になるまで焼いたと言ったのか不思議じゃないか」

「そうね。まるで、生きているのを隠すような発表ね」

ロマノフ王朝の最期のことを、桧作と加凜は調べはじめた。

ロシアの正式発表では、一九一八年七月十六日にニコラス二世の家族はすべて、ウラル山脈近郊のエカテリンブルグのイパチェフ館で処刑されたことになっていた。これは、皇帝一家を救出するという反革命陰謀が浮上したためだったという。

だが、娘のうち数人は生き残ったなど諸説あって、アンナ・アンダーソンというアナスタシアを名乗る人物も現れた。近年、皇帝一家の遺体が発見され、DNA鑑定の結果、一度は、一家九人のうちの七人の遺体を確認されたと発表されたが、その結果が間違いでないかという反論もなされ、いまだに真相は闇の中だ。

妃のアレクサンドラは、やっとのことで授かった息子が医者に見離されるような難病であったため、神秘思想に走り、怪僧ラスプーチンを妄信した。ラスプーチンのご宣託はニコライ二世の采配にも影響し、ロシアの行軍を妨げ、その結果、敵国ドイツに有利になった。ニコライが退位させられたのは、これらのことが大きいと考えられている。

その上、民衆の窮乏には目をつぶり、ロシア社交界にもなじめなかったアレクサンドラ妃の影響で、家族は全員、ペテルスブルグの冬宮にひきこもり、家族水入らずの和やかな生活を楽しんでいた。このことも、反感を買う一つの要因になった。

ニコラス皇帝はまったく良いマイホームパパで、家族の写真を撮ることを趣味にしていた。それに影響されて、末娘のアナスタシアは常にカメラを持ち歩いていた。アレクサンドラ妃はドイツ生まれだったが、小さい頃に祖母であるイギリスのヴィクトリア女王のもとに養女に出されたため、子供達を英国式の教育で育て、家庭内での会話には英語を使っていた。

彼らが一般市民だったら、ただの微笑ましい家族で済んだだろう。だが、世間への無関心は、皇帝一家に悲劇を招いた。

「ねえ、桧作くん、お願い。もう一度だけ連れて行ってくれない？ 一九一八年七月十六日のイパチェフ館に」

「うーん。わかったよ。断っておくけど、あと一回だけだからね」

桧作は、仕方なさそうにそう言った。

七月十六日の晩、真夜中一時頃に、アナスタシアは二階の寝室で、胸に抱いていた犬のジェミーが吠え始めたために目を覚ました。

彼女はエカテリブルグのイパチェフ館に家族とともに幽閉されていた。父のニコラス二世が革命により帝位を剥奪されたのち豪壮な宮殿から追い出され、この小さな山荘に警備兵の監視のもと住まわされていたのだ。

家族全員、外の警備兵の動向に常にびくびくしていた。以前なら警備兵は自分達を守ってくれる存在だった。だが、今では自分達が逃げないように監視している。だから、今では衛兵達が動くちょっとした気配でさえ、家族にとっては大きなストレスをもたらすようになっていた。

アナスタシアはベッドから這い出し、カーテンの隙間から、そっと外を覗いてみた。末娘で十七歳のアナスタシアは小柄で、姉たちに比べてとくに美貌でまさっていたわけではなかったが、ニコラス二世ゆずりの蒼い目が印象的な上に、悪戯好きでおどけたところが皆をひきつけた。

遠くからトラックが沢山の兵隊を荷台に乗せて近づいてくるのが見えた。彼女は急いで両親や姉達に知らせた。父の元皇帝ニコラス二世は事態をにわかに悟ったようで、子供達のうちの末のふたりのアレクセイとアナスタシアを呼びよせた。

「お前達は身が軽い。こっちの窓から出て、ジャックの家まで行き、助けを求めるように言って来てくれ」

ジャックは、近くの民家に潜伏している白軍の兵士だった。

「アレクセイには無理よ！」

アレクサンドラ妃がそれを遮った。

「いや、行かねばならない。男の子だ。できるはずだ」

「あなた、本気なの！？」

彼女は夫に問いかけた。

「もうすぐそばまで援軍は来ているんだよ」

「前にも二度移動したでしょ。また、きっとどこかに連れていかれるだけよ」

アレクサンドラ元妃は言った。

「いや、移動してしまったら、またチャンスを逃す。それに、今回は何かが違う。あんなに大勢、武装した兵士が来たことは、最初に連行された時だけだったじゃないか」

アレクサンドラは夫の言葉に顔色を失い、がたがたと震えはじめた。

勇敢なアナスタシアは寝間着を脱ぎ、いつもの白いレースのワンピースを着はじめた。

「ねえ、アナ、ピエロの格好が動きやすいんじゃない？」

賢く気丈な、長女のオリガが機転を利かせて言ったが、その顔も悲しげだった。

「そうね」

それで、アナスタシアはワンピースの上から仮装パーティーで使ったピエロの衣装を大急ぎで着た。姉妹全員のワンピースの内側には、母が何かのときのためにと、真珠のネックレスと、ロシア皇帝の紋章である双頭の鷲の紋章の入った懐中時計などの宝飾品をこっそり縫い付けていた。アレクセイも普段着を着込んだ。アレクセイの服の裏にも同じように宝石などを縫い付けてあった。

「ねえ、アナ、私に何かあったら、これをマウントバッテン卿に渡して」

すぐ上の姉のマリアが彼女の大事にしていたロケットペンダントを手渡してきた。姉妹の中で一番、愛嬌があって器量良しのマリアは、イギリスのマウントバッテン卿と密かに結婚を誓った仲だった。探るようにマリアの顔を覗いてから、アナスタシアはそれを受け取った。

「わかったわ。でも、私達、きっと助けを呼んでくるから」

アナスタシアとマリアは抱き合った。お互いの頬を涙が伝うのを感じた。彼女は年が近いこともあり、姉妹の中で一番の仲良しだった。

「この薬を持っていくのよ」

アレクサンドラ元妃は、ふるえる手でアレクセイのポケットに薬を入れてボタンを留めた。

「あー、アレクセイ、どうか無事で。神のご加護がありますように」

「アナスタシア、無事を祈っているわ。どうか、アレクセイに気をつけてあげて」

アレクサンドラ妃は、まずアレクセイ、次にアナスタシアの順に抱きしめて、涙ながらに言葉をかけた。

窓から覗くと、衛兵は近づいてくるトラックの方に気をとられて、そちらに向かって行った。

ふたりは母や父、姉たち、犬のジェミーにそれぞれ別れを告げ、衛兵の隙をついて窓を開け、一階の張り出した場所の屋根のひさしに出た。

アレクサンドラ元妃は泣き出し、ニコライの胸に顔をうずめた。

「待って、アナ！」

すばやく屋根を伝っていく姉に、追いつくようにアレクセイが声をかけた。

「しー、気付かれる。落ちついて、アレク。やれば出来るよ」

近づいてくるトラックの轟音にまぎれて、アナスタシアが先に地面に飛び降りた。

だが、それに続いた病弱なアレクセイは転んでしまった。血友病のアレクセイはちょっとした切り傷が命取りになりかねない。だが、彼はいつも弱音を吐かなかった。懸命に痛みをこらえる弟をアナスタシアは助け起こし、音をたてぬように走り始めた。

ふたりが出て行ったあと、しばらくして狙撃銃を持った兵士たちが行進するように、大きな足音を響かせ入ってきた。

「身支度に三十分やるから、全員、支度してから地下室に来るんだ！」

ユロフスキーは背後に兵隊を従え扉を開けるなり、厳しい口調で言い放った。どう見ても、取り入る隙はなかった。

「逆らうものはどうなるかわかっているんだろうな！」

場所を移動するのなら、地下室に行かせられるのは少しおかしな命令だった。

支度が済んでから、ニコラス元皇帝、ボトキン医師、アレキサンドラ元妃、元皇女のオリガ、タチアナ、マリアが続き、打ち合わせ通り、小間使いのアンナ・デミドワはあらかじめパジャマを着せておいたアレクセイの大きな枕を大事そうに抱えて、肩から掛けた大判ストールで隠すようにして従った。アレクセイは十四歳だったが、病気のために痩せていて、体格のいいアンナは抱き上げることができるほどだった。

「アレクセイは、具合が悪いのか？」

「はい。昨日から熱を出して、寝込んでいます」

アレクサンドラ王妃がすぐに答え、アンナは震える手で、ショールをきつく握りしめた。

室内は薄暗く、ほとんど判別できなかった。娘が一人足りないのにも、幸運なことにユロフスキー達は気付かなかった。

泥のついたチョーカーを履いてずかずか入ってきた兵士の中には、人目を盗んで宝石のついたシガレットケースをポケットに入れる者もいた。

ふたりは手を取りあって、森の中を無我夢中で走り始めた。

どこかで得体の知れない鳥が鳴き、ふいにばさばさと羽音をたてて飛び立つ。

風ではない何かが、ざわざわと梢を揺らしている。

大きな木のうろが、蒼白い月光に照らされ、不気味な怪物の顔にも見えた。

だが、そんなことを気にしている暇はない。

足元には木の根が縦横に走り、前夜に降った雨でぬかるんでとても滑った。

うっかりしては転んでしまう。

やっとの思いで、ふたりはジャックのいる農家の灯りが見えるところまで辿りついた。息をきらせたアレクセイを気づかって、アナスタシアは立ちどまった。

「大丈夫？ アレク」

「うん...」

だが、彼の足を見ると、さっき転んだところが赤く腫れあがって、血が流れ続けている。アナスタシアはあわてて持ってきた薬を塗り包帯を巻きつけてやった。頬が真っ赤だ。額に手をあてると熱かった。熱が出てきたらしい。なんて可哀想なアレクセイ。

「もうちょっとだから、頑張ろう」

「うん。ありがとう...」

アレクセイは痛々しい笑顔を作って、再び、足を引きずりながら歩きはじめた。

その直後、パンパンパンという銃の連射音がイパチェフ館の方から響いてきた。

彼らは震えながら、屋敷の方を振りかえった。

「どうしよう、アナ。間に合わなかった！」

アナスタシアは、自分もパニックになりそうなのを無理に落ちつかせ、弟を力づけようとした

「お父様はわかっていたのかもしれない。きっと、私達だけ逃がしてくれたのよ。だから、ちゃんと逃げなきゃいけないわ」

アレクセイは涙をこぼした。

「泣いちゃだめよ」

アナスタシアはアレクセイの涙を拭いてやったが、彼女の顔も濡れて光っていた。そして、ふたりは、再び、ジャックの家の灯りめがけて力を振りしぼって歩きはじめた。

『頑張っ！』

誰に悟られることもなく様子を見ていた加凜がつぶやいた。

『あれが、礼郎さんがソフィーのお母さんだと言ったアナスタシアだね。この後はアンナと名乗っていたのかもしれない。ソフィーは彼女によく似てる。多分、運良く白軍に保護されて、シベリアを経て上海に辿りついたんだろう。でも、弟のアレクセイは長く生きていたとは思えない。血友病で満足な治療も受けられなければ、死んでしまう』

『他の皇帝一家は、ここで殺されたの？』

『色んな説があって、確かなことはわからないんだけど、恐らくそうだ。ユロフスキーの報告書によると、トラックの荷台には、死体を入れて上から覆うために二枚のビニールシートが敷かれていたそうだ。半地下の狭い部屋に連れて行かれたニコラス元皇帝一家は小間使いの女まですべて壁に並べられて銃殺されたらしい。処刑後に、血まみれの死体はシートに乗せてトラックまで運ばれ、とある金採掘の廃坑まで運ばれ埋められた。そのとき、服の中に縫いつけられていた宝飾品などはすべて略奪され、モスクワに送り返された』

そのとき、イパチェフ館では兵士達が死体を^{あらた}検めていた。

「隊長！ これはアレクセイではなく、枕です」

「それから、皇女が一人足りません」

「なんだと！ クソガキめ。しかし、反逆者達がここに来るまでに死体を処分しなければならない。とりあえず、トラックに詰め込んで、ここを出るんだ。残った者達は、屋敷の中や付近を捜索しろ。逃げた子供を捜すんだ。^{かくま}匿っている者達は銃殺にすると脅すんだ！」

トラックは遺体を載せると、急いでそこを後にした。

アナスタシアは人知れず生きていく道を選んだのだろう。その結果、アンナ・アンダーソンのように偽者か本物かの裁判を、何十年もやらずに済んだのだから、その方が賢明だったかもしれない。

検作は森が途切れて原野になっている場所まで来ると、彼らを追いかけるのをやめ、オカリナを吹きはじめた。不思議な音色が荒野にこだまし、風のうなり声と混ざり合う。一瞬、アナスタシアとアレクセイがこちらを振り返ったように見えた。彼らにも聞こえているのだろうか。検作はいつまでもいつまでも^つ憑かれたようにメロディーを奏でつづけ、加凜も放心したように聴いていた。人の運命を眺めるだけで、何もしてあげられないのが歯がゆかった。

しばらくして、検作は吹くのをやめた。

遠くからごろごろという音が聞こえてくる。

荒野の向こう端で、遠雷がおもちゃみたいに小さく光った。

にわかに横なぶりの風が草を激しく揺らしはじめ、ピューという風の音が聞こえてきた。

暗雲がめまぐるしい速さで流れ、妖しく輝く満月を隠し去っては、現出させる。

もうすぐ、嵐が来るらしい。

『私達には、何もしてあげられないのね』

『うん。見ていただけさ。だから、昔の出来事を覗き見して、一体、どんな意味があるんだろうって、時々、思うんだ』

『そうなの。そうですね』

彼のことを理解してあげられるのは自分しかないのではないか。彼の寂しそうな顔を見て、ふとそんな気持ちになった。

『桧作くん。でも、私、五年前のあのとき、ショックは受けたけど、心のとげが消えた気がしたの。私はこころのどこかで父を恨んでた。私達を捨てたと思っていた。でも、ひとりで寂しく樹海に入っていく父の後姿を見たら、そんな気持ちは吹き飛んじゃった。父は何も見えなくなっていたのよ。きっと、自分の重荷に耐えられなくなってしまったの。私達がそれに気付いてあげられなくて、ただ、頼るばかりだったのを後悔してる。本当はお父さんを助けてあげられたらよかったんだけど』

『そうか。そんな風に思ったんだね』

『ねえ、写真館で私が見た少女の幽霊が、なんて言ったか覚えてる？』

『Don' t forget us. だっけ』

『うん。きっと、それが意味なんじゃないかな。昔、起きたことを思い出してあげるだけで、死者は救われるのかもしれない』

『そうかな。そうだといいんだけど』

『きっと、そうよ。ねえ、私達の人生なんて、平凡でつまらないなんて思ってきたけど、実際、その方が幸せなことも多いんでしょうね』

『そうだよ。俺たちはきっと幸せな方さ』

桧作は今まで思ったこともないセリフを、自然に口にしていることを自分でも驚いた。それは、加凜の腕の温もりのせいかもしれなかった。

『ねえ、桧作くん、現実に戻っても、一緒にいちゃだめ？』

『えっ？』

『やっぱり、だめか』

『いや、俺もそう言おうと思ってたんだ。もっと、君を知りたいんだ。こちらこそお願いします。黒田さん。いや、加凜と呼んでいいかな？』

桧作は加凜をじっと見つめた。

雨と風がふたりに容赦なく降り注ぎはじめた。

ふたりのシルエットが、重なりあうのが、雨で煙る中でぼんやりと浮かんで見えた。

「どうだい、最近はどんな写真を撮っているのか、たまには見せてくれないかね」

ある日、栖栗は礼郎と久々に顔をあわせ、こう話しかけた。

「わかりました。いいですよ。あなたの評価を受けてみようじゃないですか」

珍しく、礼郎も明るく自信ありげな表情で答えた。

「なかなか良く撮れてるじゃないか。でも、ネガが少ないようだが。これだけかい？」

「近頃、フィルム写真では限界を感じているんです。それで、新しい試みをはじめたんですよ。

ちょっと、これを見てください」

礼郎はノートパソコンを開いて、中に保存されている写真データを栖栗氏に見せた。

「誰が、この写真館でデジタルカメラを使っていいと許可したかね！」

栖栗氏は、怒ってそう言った。

「なんでデジタルカメラがいけないのか俺にはわからないんです。だから、あなたが許可しなくても、やっていいと判断して見切り発車したんですよ。ホントに、なんで、あなたはそんなに石頭なんですか！」

「なんだと！ 私を石頭だと言うのか」

加凜ははらはらしながら、様子を見ていた。下手に口出ししては、こちらにまでとばっちりが来るかもしれない。

「バッカみたい。そんなことで喧嘩して。技術っていうのは、どんどん進歩していくもんでしょ。今は電気があるのに、ロウソクだけで暮らしている人なんかいないじゃん」

万由子が、そんな言葉を投げかけた。

彼女の無神経とも思える言葉に、栖栗茂の罵声が飛ぶかと、身構えた。だが、みるみる顔色を変え、下を向いてしまった。加凜達は少し拍子抜けした。

「そうかもしれない。フィルムは、これから先、もう失われていく技術なのかもしれないね」

彼は、肩を落として寂しそうにそう言った。

それから、栖栗は礼郎にデジタルカメラで撮影をすることを許可した。こころなしか、栖栗はとても老け込んだように感じられた。

「私、ここを辞めようと思って」

ある日、万由子が加凜に言った。

「急にどうしたの。何か嫌なことでもあったの？」

「いえ、そうじゃないんです」

「じゃあ、なぜ？」

「もっと、役立つ技術を持ってなきゃだめだと思ったんです。私、加凜さんみたいなカメラマンになりたい」

「そう、嬉しいこと言ってくれるじゃない」

加凜は万由子の言葉に驚いた。

「栖栗さんは、私の話を楽しそうに聞いてくれるけど、技術は自分で身に付けるものだって言って、教えてくれるわけじゃないんですね」

「そうね、栖栗さんはそういうタイプの人ね」

「それに、この前はあんなこと言っちゃって、反省しているんです。なんだか、栖栗さん、元気がなくなっちゃって、可哀想な気がして」

「そう。楠山さんも責任感じていたのね。でも、あれは本当のことだから、あなたが言わなくても、いつかは栖栗さんも気付いたんじゃないかな。そんなに気にすることないわよ。こんなことで、ずっと老け込んじゃう栖栗さんじゃないと思う」

「そうですかね」

「で、辞めてどうするの？」

「専門学校に行くことにしようと思って」

万由子は顔を輝かせて言った。

「へえ、頑張ってる！ カメラマンは女性にも向く職業だと思うわ。あなたは子供に受けがいいから、そういうところも有利だわ。応援してるから！」

「ありがとうございます」

加凜は、同じ女性として万由子のことを応援したいと素直に思っていることに安堵した。これから先、デジカメが主流になっていったとしても、基礎を知っているのは自信にもつながるはずだ。

毎日が、あわただしく過ぎて行く。

楠山万由子が辞めてから、また、もとのようにとても忙しくなって、何も考える暇のない日が続いた。

だが、ときどき、あの可愛い女の子の幽霊のことを思い出す。でも、あれ以来、もう彼女の足音も姿も見えていない。

「まあ、素敵な写真ですね」

今日、撮影に来た熟年の女性が目を細めて、入口にあった写真を褒めた。

ええ、とても古いものなんです。加凜は曖昧に答えた。

そこには、あの四人の幼い姉妹達の写真が置いてあった。

王族一家は、誰に見とられることもなく消えていった。あの子、小さなソフィーの忘れないでほしいという気持ちもはかなく消えていくのだろうか。せめて、あの写真はいつまでも、残ってほしいと思った。加凜は栖栗に頼んで、写真館の入口にあの姉妹のセピア写真を、小さなフォトスタンドに入れて飾ることにしたのだ。

そんな矢先だった。栖栗が風邪をこじらせ、肺炎になって入院した。年を取ってからの肺炎は命取りにもなりかねない。なかなか抗生物質が効かずに、栖栗も危ない状態が続いた。

「栖栗さん、桧作くんを連れてきましたよ」

少し、病状がもちなおしてきたのを見計らって、ある日、加凜は約束を果たすために、桧作を説得して病室に連れて行った。

栞栗は酸素マスクをして眠り続けていた。

目を覚ますのをしばらく病室で待った。ふいに栞栗が薄く目を開けた。はじめはぼんやりとしていたが、栞作の顔を見て彼の顔色が変わった。

「おお、なんと。孝一くんではないのか」

加凜がマスクをはずしてあげると、栞栗は驚き顔でそう言った。

熱に浮かされたせいかな、栞栗は賢司を祖父の孝一と取り違えているようだった。加凜が否定しようとした矢先、栞栗は何かを思い出したような顔をした。

「君はあそこで死んだのではなかったかね。ああ、そうか。迎えにきてくれたのだね」

「栞栗さん！ あのこの人は...」

そう言おうとした加凜を栞作が手で制した。言わせておけばいいと小声で耳打ちした。

「あの時は済まなかった。わしを恨んでいるだろうな。ああ、私はなんであんなことをしてしまったんだろうな。許してはくれないだろう。だが、ずっと君に詫びたかったんだ。君を見捨てて一人逃げ出して、申し訳なかった」

加凜は彼の言葉に呆然となった。栞作はただ黙って彼を見つめていた。

「やはり、そうだったんですね」

「何か変だね。君は栞作君じゃないのかな」

「私は栞作孝一の孫の栞作賢司です」

「そうだったか」

栞栗は、観念したように栞栗に話しはじめた。

——実はソフィーは、私がアメリカで再会したとき、栞作孝一君の友人だったんだよ。知っていたかね。

栞作賢司はうなずき、栞栗はそうだったかと言って話を続けた。

——私はニューヨークに写真の修行に出て、そこで栞作君と、偶然、再会した。そして、夕食に誘われたときに、彼のガールフレンドを紹介されたんだ。驚いたことに、それは、あの上海で出会った白系ロシア人の少女、ソフィーだったんだよ。彼女は見違えるほど、美しく成長していた。だが、彼はまだソフィーと正式につきあっていた訳じゃなかったんだ。本当に幼馴染みとして彼女を可愛がっているという感じだった。彼女は我々より二歳下だったからね。私はちょくちょく彼らと夕食をともにした。それで、次第に彼女が好きになっていった。

君はソフィーと交際しているのかって、私は栞作君に尋ねたんだ。でも、彼は否定した。しかし、彼はソフィーのことを好きなことは知っていた。そんなのは何も言わなくても、態度からすぐわかった。でも、当時の日本人はとても奥ゆかしかったんだね。結婚の意志が固まらないうちに、女性にむやみに手を出すような男はあまりいなかったよ。

それで、私は彼女を直接、デートに誘ってみたんだ。

私は知っていた。ソフィーも本当は栞作君に心惹かれてひることをね。だが、栞作君がなかなか言い出せないでいるのに、業を煮やしていることも見抜いていた。彼女からすれば彼へのさやあてのつもりもあったかもしれない。案外、簡単に了解してくれたんだ。

松作君の方では、ソフィーの気まぐれだと高をくくっていたかもしれない。でも、やがて私達はよく逢うようになって、次第に惹かれあうようになった。そして、とうとう婚約にまでこぎつけた。

松作君は明らかに落ち込んだ。やはり、彼女が好きだったんだね。私は、彼に悪かったと今でも思っているんだ。しばらくして、彼は日本に帰国して、日本の女性とお見合い結婚をしたと聞いた。

その当時は、アメリカはベトナム戦争のさなかだった。日本は高度経済成長で、みんな希望にあふれていた。

私は新婚だったが、戦場の現場を報道するために、ソフィーと生まれたばかりの子供を残し、ベトナムへ向かった。

サイゴンで、私は松作君にまた再会したんだよ。

私達はくさり縁かなと少し思った。でも、彼はソフィーのことはもう忘れて、日本で円満な家庭を築いたと嬉しげに語った。私はここから彼を祝福したよ。

やがて、われわれは比較的治安のいいサイゴンから離れ、密林で戦う米軍のキャンプに従軍取材することにした。米軍に従軍するうち、日に日に精神的にも肉体的にも参っていった。そこはアメリカや日本の平和で安穏な世界とは、まったくの別天地だった。本当の戦争というものを、私はそれまで知らなかった。殺すか殺されるかの世界だ。自分が実際に相手を殺すわけではないが、その様子を見るのは辛かった。同じ人間同士が、殺しあうのだ。相手に家族がいるなんてことは、一切、考えてはいけない。考えていては自分がやられてしまう。みんなアメリカの正義のために戦う若い兵士たちだった。だが、現地の貧しいベトナム人が死力を尽くして戦い、無表情に死んでいく姿を目の当たりにして、その正義は次第に根拠のない浅はかなものに変り果てていった。ベトコン達を責めることはできない。彼らは働き者なのに、貧困にあえいでいた。いくら働いても豊かにならないという絶望的な世界。彼らは、傀儡政府に不信感を抱いたのも当然だろう。自分達のしていることは本当に正しいのだろうか。米軍兵達は、みんな信念を見失い、無力感と疲労に苛まれていった。だが、うかうかしては自分達も殺されてしまうんだ。夜、昼となく銃撃戦が繰り広げられた。ベトコンはどこへでもトンネルを掘ってきて真下から顔を出すことだってあった。神出鬼没だ。トンネルから爆弾を放り込まれることだってあった。前線がどこかわからない。日々刻々と戦いの最前線は移動する。まったく攻撃して来ないことが続いたり、突然、包囲されてしまうことだってあった。米軍兵達も南ベトナムの兵士たちも、接してみるとみんなとてもいい人間ばかりだった。個人としてはいい人なのに、なぜ人間は戦うのだろうか。その疑問と理不尽さは膨らむばかりだった。

でも、あのとき、松作君という同じ日本人と一緒にいてくれることで、私はどこかで安心していったんだよ。だから、あんなことに耐えられたのかもしれない。

それは、ある日、起こった。起こるべくして、起こったのかもしれない。戦う意味がわからぬまま、無理に戦い続ける者達に勝てる見込みはないのかもしれない。我々はハイウェイパトロールに出たとき、敵に包囲されてしまった。敵の銃撃に対して、米軍兵と南ベトナム軍の兵士達は応戦した。武器もなにも持たない私は、這いつくばって逃げた。でも、桧作君は這いつくばりながらも、カメラを向け続けた。私は物陰に隠れた。あつという声を聞いて、私は隙間から一瞬、様子を見た。そこには桧作君が打たれて血を流していた。彼を助けなくてはと思ったが、腰が抜けてしまって体が動かなかった。私はそのまま、物陰にかくれて銃撃が終わるまで待っていたんだ。私はまったく不甲斐ない男だ。日本でベトナムの写真を発表したりしたけれど、実は私はまったく意気地のない男なんだよ。

そう言うと、桧栗は泣きはじめた。

「私は、本当のことを言うと、ずっとあなたのことをころのどこかで責めていたのかもしれませんが。あなたが助かったのに、なんで父は死んだんだろうって。でも、そんなのは逆恨みだっと思おうとしていました。今日話をきいて、やはり納得しました」

桧栗は桧作を畏怖するような目になって、本当に済まなかったと涙を流した。

「いえ、勘違いしないで下さい。あなたの話を聞いたら、やはり、自分でもそうじただろうと思ったんです。あなたのせいじゃない。戦争のせいでしょ。どんなにいい人も戦場では鬼にならなきゃいけない。きっと父も、あなたを憎んではいませんよ。父はやりたいことをやって死んでいったんです。それにソフィーさんのことだって、多分、そのときにはほとんど忘れていたと僕は信じたい。父は私の母を愛していたと思います。そうでなくては、母が可哀想です。もう忘れましょう。あなたの話が聞けて、よかったです」

その後も桧栗は涙を流し続けた。加凜達は挨拶して病室をあとにした。

そして、桧栗は奇跡的に快復して、また写真館へ戻ってきた。

プランターのトマトも持ち直し、また、実を沢山つけだした。だから、球根を植えるのは先延ばしにして、しばらく様子を見ることにした。

そうになると、買ってしまったフリチラリアの球根を植える場所がない。

何かが上手く行くと、何かがはみだすのが世の常だろうか。

いや、すべて上手くいくことだって、あるはずだ。また、鉢を買い足せばいい。

少ない時間を見て加凜は、鉢の植木の枝を切ったり、これから何を植えるかなどを考えていた。だが、あまり、ゆっくりしている暇はない。今日は、午後から桧作と出かけることになっていた。

その夜も、ぼんたんみたいに大きな満月が出ていた。

加凜は出かけた帰り道、その月を見ながら桧作とともに夜道を歩いていた。

途中、街灯のまわりを大きな蛾が飛びまわっているのを見かけた。

「クスサンだな」

桧作が言った。

「何それ？」

「ヤママユガの仲間、羽の大きな模様がフクロウの目みたいに見えるやつ」

「あー、それ、この前、見たかも」

加凜は、あの秋の日にベランダで見かけたヤママユガのことを思い出した。

「クスサンて、どういう字を書くの？」

「多分、楠の木の楠に、^{かいこ}蚕 っていう字じゃないかな」

「蚕か、山じゃないのね」

クスサンは白っぽい大きな羽をばたつかせ、月と見間違えているかのように、街灯の周りを飛び回っていた。

楠山万由子がヤママユガの化身だったなんて話は面白いなと思ったが、そんなの自分でも信じられないと加凜も思う。でも、検作のような人がいるのだから、世の中、何があるかわからない

。

「言おう、言おうと思っていたんだけど、実は、写真コンテストに落選しちゃった」

「そっか。残念だったね。いい写真集だと思ったんだけどな。審査員の見目がなかったんだよ。でも、また次があるさ」

「ううん。もう出すのやめた」

「なんで？ 諦めるわけ？」

「うん。だって、このコンテストに優勝した作品、凄いのかもしれないけど、私の心には何も響いてこなかった。私が撮りたいのはあんな写真じゃないの。街の人々の幸せな笑顔が撮りたいんだ。だから、私は写真館で働き続ければそれでいいんだと思ったの」

「そっか、それもいいかもね」

「うん。でも、もしも栖栗さんが亡くなったりしたら、また、写真館を探さなきゃいけないんだろうけど。いつかは、独立して自分の写真館を開きたいな。それにああいう写真も片手間に撮り続けるつもり。機会があったら、写真集として出版もしてみたい」

加凜は思いついたように、急に真面目な顔で向き直って検作に言った。

「ねえ、私の前から急に消えたりしないって、約束してね」

「何、急にどうしたんだよ」

「なんとなく不安になるの」

「わかった。約束するよ。俺もこれからは、普通の探偵になるよ。もう、無茶はしない」

「本当に？」

「うん。本当はあの能力を使うと疲れるし、危険なんだ。今度、お母さんにも会いに行こう」

「わあ、じゃあ約束ね」

加凜は桧作と組んだ腕に頭をもたせて、また大きな月を見上げた。

ほろ酔いで夜風に吹かれると心地よかった。ずっと、こんな風にしていられたらいいなと思った。

(完)

※読了ありがとうございました。この物語はフィクションです。

〈参考文献〉

「フォトグラファーになるには」 飯沢耕太郎 山内宏泰 (ペリカン社)

「新朝日カメラ講座4 撮影機材と暗室現像編」 朝日新聞社編 (朝日新聞社)

「世界写真史」 飯沢耕太郎 (a s s美術出版社)

「皇女アナスタシアとロマノフ王朝 別冊歴史読本」 (新人物往来社)

「アナスタシア「消えた皇女」」 ジェイムズ・B・ラヴェル 広瀬順弘訳 (角川書店)

「上海歴史地図」 木之内誠編著 (大修館書店)

「上海物語」 丸山昇 (講談社)

「ベトナム戦記」 開高健 (朝日文庫)